遠なる希望と妙神の手腕とを抱きて桐の一葉と共に散りぬ固より是天なり命なりと雖ども畫界に一つの明星を失ふ哀惜措く能はざるもの何ぞ後進子弟に限らんやされど氏が社會に貢献せし多大の事蹟は君の名と共に千歳萬古不朽なるべし、涙ながら師友なる故大下氏に對する感想の一節を述ぶ。

故大下氏は多趣味の人にて俳句も亦入神もの多し彼は新派を好み嘗て屢〻日本新聞に投じ汀鷗の名にて入選のもの多かりし

（余は今其句を忘れたり）

（森脇英雄）

大下君を懷ふ

高知縣師範學校　豐田潔臣

十年一日の如く其交を渝えざりし親友大下君を失ひたるとは私に取りて悲哀の至りであります而して「みづゑ」の讀者が良師友たる君と永へに別るゝ苦痛に對して私が深く同情を表する所以は去る三十八年七月「みづゑ」初號の發刊につき私は君に勸めて其決行を促したる關係があるからであります惟ふに君は技術家たる素質を有すると共に事業家たる才幹を具へ熱心に敏活に事を行はれたるは皆知友の認むる所であります君の性格は理性と感情との調和が善く附いて居つて意志活動もまた程よく伴ふてあつたから社交も立派にやられ仕事も十分出來て且つ常に品格を保たれて居られた其發達したる常識は君をして判斷を誤らしめず其行爲に過失なからしめたものと思ふ君が友情に厚きは私の忘るゝ能はざるものがある曾て私が東京在住の時猿樂町に大火があつた君は目白坂より望んで私の寓所三崎町燒けつゝありと認められ義弟と共に疾走來訪せられた山妻出でゝ迎ふれは流汗瀧の如くであつた當夜私は本所に赴き近所の火災を知らず歸りて之を聞き君の情誼深きに感謝した次第であります爾來遠く隔り毎年一回上京の期を樂として居つた、本年六月の會談は最終となつた君の溫容髣髴として眼前に在る心地す。

拜復小生はさほど深く故人を知らず從てまた何事をも語るべき資格はこれなく候唯其の長身疲軀を觀てその作品に對する時は一種いふべからざる同情を感じ申候冷靜なるが如くにしてしかも情味こまやかに粗放なるが如くにしてしかも用意の周到なる今や唯遺品を觀て益〻其感を深うするのみに御座候謹言

十月十六日夜

中川忠順

亡き夫をしのびて

春子

けふよりはたれにかたらむうきとを
　つけなむ君のなしとおもへば
もろともにみはかのもとにおもふかな
　心にかゝる菊の一もと
いたましき和子おもへばおしからぬ
　命なれどもおしまるゝかな
消ゆるべきときはともにとちかひしを
　つれなや君はひとり行きます
う津しゑはありし昔にかはらねど
　言葉かはさむすべもあらじな

かたみたになくは何とてながらえつ
おもふもつらきかゝるうき世に
おもひきやま白ききぬにつゝまれて
君がみひつきおくりまつるとは

（故大下氏の家庭）

虫の音さえもいとゞほそりぬ
もみぢ葉の散るよりはやく逝きませし
君がおもかげいかで忘れん
惜しまるゝ君は逝きましかひもなき
身をはながらえていかにおくらん
秋深し夜ごとに通ふ夢まくら
さめてはまたも涙こぼるゝ
亡き君はいたむ玉づさ數ぞひて
なをおもふかな秋の夕くれ
うつくしき花輪のもとに和かせこの
みたまはとはにねむりますらむ
もみぢ葉はきにくれなひに色ませど
繪筆そめます君はいまさず
十和田湖の秋はかたみとなりにける
この秋またで散りし君はも
木がらしのおとなひくればまたさらに
君がおくつき戀ぞわすらふ
さちうすき身をなげくよりかなしきは
君がよはひのあまりみぢかき
亡き夫のめてたまひたる白菊は
君まちがほに咲きそめにける

さちうすき子をも妻をもふりすてし
みたまやいづこかへりませ君
かりの世のちぎりはよしや淺くとも
ふかくちかはん二世のちぎりを
日毎〳〵みはかに通ふ野邊の道